鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 7 月 3 日）

為政第二

1　子曰く、政を為すに徳を以てすれば、譬えば北辰の其の所に居て衆星の之に共うが如し。

孔子が言うには、政治を行う時には道徳をもってするが良い。自分自身の人徳を上げるように努力するのが一番良い。例えば夜空を眺めてみれば、北極星が天の中心、あるべき所にいれば、北極星を取り巻く星々が皆、その中心である北極星に向うように見える。中心にある人物は、あまり自分の居場所を変えてはならないという意味です。

今の時代に合わせると、麻生さんがちょうど良いでしょう。麻生さんが言を左右にするという事は、北極星が右に行ったり左に行ったりするようなものです。麻生さんに寄って行こうと思う者もいるはずだけれども、あれだけ言葉が乱れに乱れてしまうと、中心人物である麻生さんに向おうとする者がいなくなる。したがってここは、会社であれば経営者、学校であれば校長先生といった中心人物は、でんと構えて、言葉をコロコロ変えずに態度も終始一貫しているのが良い。そうお読み戴くとよろしいでしょう。

2　子曰く、詩三百、一言以て之を蔽う。曰く、思邪無し。

『詩経』は、孔子が 3000 以上あった当時の民謡やその他の詩を 311 篇にまとめたもので、現存しているのは 305 篇と言われています。「三」という数字は沢山という意味ですから、ここは、詩はたくさんある。3000 を 300 にまとめたと捉えれば良いと思います。

3000 以上あった詩をまとめたけれども、それを貫く考え方は、すべて一言で言い切れる。それは「思い邪無し」である。邪気のない、何も考えない無邪気な詩が良い、と孔子が言ったわけです。賞を取ろうとか、誰かを陥れようというような作為があって詩を作ると、邪気が出てしまって失敗する事が多い。

これは別に詩に限らずで、周りを見渡していると、「思い邪有り」が世の中に溢れていますので、自分自身も「思い邪有り」と言われないように努力しなければいけないと感じます。

3　子曰く、之を道くに政を以てし、之を斉うるに刑を以てすれば、民免れて恥ず

ること無し。之を道くに徳を以てし、之を斉うるに礼を以てすれば、恥ずること有りて且つ格る。

孔子が言うには、国民を引っ張っていくのに法律を中心にしてやっていくと、非常に問題が多い。一律に国民を従わせる為に刑罰を中心でやれば、国民は刑罰から逃れようとして抜け穴ばかりを探して、悪い事をして見つかっても恥じる事はない。

国民を導く上で、道徳を中心に進めていく。政治家や総理大臣が、善い行いを国民の中に広めたいと思ったならば、礼を中心にして、自分自身の人徳を上げるようにしていけば、国民も自然と、恥ずかしい事はやってはいけないと善い行動をとるようになる。

リーダーシップをとる場合には、これをやってはいけないと鞭をもって進めていくのではなくて、自分自身の人格を上げる事でリーダーシップを発揮するのが一番良いと孔子が言っています。

しかしこれは現実にあわせて考えると理想論だと感じます。日本の国全体を眺めてみると、天皇家はこういった感覚（人徳とか道徳）をかなり感じますけれども、その次の総理大臣以下、国務大臣は、何故こんな酷い人が出てきたのかと思うような人達ばかりになっています。これは、実際にやってみればよいだろうと感じています。刑罰でもってどんどん進めれば、抜け穴探しでとんでもないことになるでしょう。但し、人徳云々でやった場合にも、これはかなり大変な事になると思います。相当なリーダーシップを持った人間が出てきて、これを実行してみればよいのだと思います。

渋澤栄一さんが書いた『論語講義』の中からご紹介します。

「**思い邪無し**」という部分で、渋澤栄一さんは、「夫婦和合の道は、思い邪無し」と言っています。「家にあっては小児のように、無邪気になる事が必要である。例えば、夫が今夜は団子にしようと言ったら、妻はそれが良いと言って団子を作るようなものだ」と書いています。

「**民免れて恥ずること無し**」の部分について、歴史は繰り返すという事を書いています。原敬首相が当時、「政治は力である」と豪語したけれども、増上慢になって結局倒れてしまった。江藤新平もその当時、同じようなものだ。力がすべてだと執政すれば、末路は哀れなものだと渋澤栄一さんは言っています。

田中角栄さんも似たようなものですね。政治は力、力は数、数は金で買う・・・という流れで、そこまでやってしまうとやり過ぎだと感じます。

又、太閤秀吉については、出世をしていく時までは良かったけれども、上り詰めてしま

ったらば、猜疑心の塊のようになって、関白にまで任官した甥の秀次を死なせてしまったわけです。人間、権力を極めた時が危ない。権力を極めるというのは、一国のトップに上り詰める事もあるでしょうし、一つの組織の中でトップになる事もあるでしょう。自分がトップになったと思った時には、引退の仕方をよく考えていないと末路が悲惨なものになる、という事を渋澤栄一さんが話されています。

本日は以上です。有難うございました。